

笑いにあふれた世界と窮地

——タンザニアの零細商人を事例として——

小川さやか

はじめに

アフリカ諸国でフィールド調査をしている研究者、あるいはアフリカ諸国で活動する実務家との談話において「アフリカの人びとの明るさ」を指摘する言葉を聞くことは、珍しいことではない。もちろんその場合、アフリカ人や黒人種、特定の民族が「ネアカな人びと」であるといった本質主義的な解釈がなされているわけではない。「彼らは驚くほど明るい」「彼らは本当に良く笑う」という語り口は、たいていの場合、何らかの「にもかかわらず」を前提としている。「日本で暮らす私たちよりずっと困難な生活をしているにもかかわらず」「紛争のさなかにもかかわらず」「数カ月先の未来すら不確定であるにもかかわらず」といった具合に。たとえば、小川了は、セネガルのインフォーマルセクターとムリッド教団を主対象として、国家の制度・公権力と草の根の人びととが相互に切り込みあい、関わりあってゆくことで独自の国家像を創り上げていく過程を描いた『可能性としての国家誌』において、次のように述べている。

「ここで述べることは…（中略）…アフリカの都市で困難な生活をする人々の多くに見られる驚くほどの陽気さ、困難にもかかわらず生活を心底楽しんでいるらしいその生き方のことである。人々の「明るさ」と記すと、あまりにも陳腐な表現でしかなくなってしまうが、人々の生き方を前に、筆者は正直に言えばしばしば「驚き」さえ覚える。ともすると生活の苦しさからにじみ出やすい生活臭、「惨めさ」を感じさせない生き方に驚く。それどころか、むしろ生き生きとした表情を感じるの方が多くのである。それは端的には、男女問わず人々の「笑い」、高らかなる「笑い」に表れる」（小川 1998：267）。

小川は、「彼らの笑いは何を根拠にしているのだろうか」と続けて自問し、次のように返答する。

「冷淡な第三者として皮肉な見方をすれば、それは「そうするしか方法がない」から「笑う以外に方法がない」からであるようにも見える。極言すれば、自分たちの生活が変わることはないという絶望が、彼らをして笑わせているのだという解釈である。しかしその解釈はたぶん、間違っている。彼らが笑うのは生活に「張り」があるからである。この「張り」は、常に工夫を重ねなければ生きてゆけないという単純な事実にもとづいている…（中略）…困難な状況に生きる人々が笑うというのは、とにかくどうにかしてその場を乗り切るという気力、工夫、それにもとづいている。その場の困難を切り抜ける気力と工夫が、人々に「腹の底」からの笑いをもたらすのである」（小川 1998：268-267）。

このように小川は、「なぜ困難のさなかでも人びとは笑うのか」という問いに対して、アフリカの都市住民は、将来に対する漠とした不安などという甘さを含んだ感懐を抱くような状況にはなく、まず今このときを切り抜ける必要性を伴う切迫した状況を生きており、切り抜けるためには気力が必要であり、その気力が笑いを引き起こし、かつ何とか「切り抜けてきた」という自負をもとに人々は難局を切り抜ける気力を維持し、ふたたび笑うのだという論理で説明した。つまり、彼は「困難のさなかにあるにもかかわらず」人びとは笑うのではなく、「困難のさなかにあるからこそ」、人びとは腹の底から笑うことができるのだと指摘したといえる。ここで小川は、セネガルの都市住民がその時々々の難局を切り抜ける戦術を説明するために、ブリコラージュ (bricolage) とデブリイヤーージュ (débrouillage) のふたつの概念を対比する。

ブリコラージュは、レヴィ＝ストロースが『野生の思考』(1976)で提示して以降、文化人類学の議論で広く使用されるようになった概念である。一般的には首尾一貫した理論や設計図に基づいて物をつくる「エンジニアリング」(技師)の思考と対比して、あるいは全体を見通したうえでなされる戦略と対比して、ありあわせの材料をもちいて、臨機応変にものごとを成し遂げる「器用仕事」「戦術」(cf. ド・セルトー 1987)であるとされる。小川は、都市インフォーマルセクターの実践をブリコラージュでくくるのは不十分かつ不適切であり、むしろ彼らの実践の根幹にある概念はデブリイヤーージュであると指摘する。ブリコラージュとデブリイヤーージュとの違いは、前者は、特定の課題を解決する創意工夫といったニュアンスが強いものに対して、デブリイヤーージュでは、物事の解決を迎えるわけではないことにある。とりあえずその場だけをしのげばそれでよい、先に生じる新たな困難にまで構ってられないといった状況において発揮される戦術、小川の言葉で言えば、「自身によって立つ立場さえも臨機応変に変えつつ」「切り抜けて切り抜けてを重ねて」(小川 1998: 271)生きていく戦術がデブリイヤーージュである。卑近な例を挙げれば、ある窮地を解決するために「その場しのぎ」の嘘をつき、それが「ばれた」という窮地にまた嘘を重ねるといったことだ。だが、そうやって切り抜ける以外に方法がない時もある。デブリイヤーージュは、「ブリコラージュで含意される積極性、建設性には欠けるかもしれないが、その場を切り抜けることにかけては断然の強みを発揮」(小川 1998: 271)する。そして、つねに切り抜けて重ねていかねばならないことは、つねにそのための気力を維持していく必要性を伴う。それが、笑いの源泉であると小川は指摘した。

私は、2001年から2010年までタンザニア第二の都市ムワンザ市で、マチンガ (*machinga*)と総称される零細商人の商慣行や商実践、仲間関係を調査・研究してきた。私も小川と同じように、零細商人たちのその場を切り抜ける巧みな知恵や工夫、そして困難な局面を切り抜けた経験に裏打ちされたある種のたくましさに関心を持ち、彼らの商慣行とそれを支える社会関係を、デブリイヤーージュと通じる側面の多い「ウジャンジャ *ujanja*」という概念に着目して論じた(小川 2011)。笑いの源泉が気力を維持するためなのか、それとも笑うから気力が維持されるのか、その因果関係についてはさておき、たしかにマチンガたちもよく笑う。だが本稿が注目したいのは、笑いと気力や張りとの関係ではなく、笑いが彼らの商実践、デブリイヤーージュ、ウジャンジャを駆使した実践に不可欠なものとして組み込まれている点である。また本文で論じるが、西洋近代的な思考様式に支配された世界では、笑いの「因果関係」を解くことが困難なのかもしれない。

本特集の他の執筆者が言及するように、幾多の哲学者や思想家が挑みながらも、笑いの一般理論はまだ構築されていない。笑いの一般理論が困難なのは、第一に、笑いが人間のあらゆる感情の創出と関連づけることができ、笑いが非＝人間もふくむ、あらゆる存在と人間との複雑なコミュニケーションにおいて成立していることによるだろう。だが「アフリカ」を共通のテーマに盛り込んだ本特集の課題において、より重要なのは、笑いがきわめて文化的な現象であることである。アフリカ地域を対象とした文化人類学者であり日本の民俗学者でもある小馬徹は、次のように指摘している。

「ベルグソン等、笑いの一般理論の解明を目指す従来の研究の多くは、暗黙のうちに自らが生きている社会のコスモロジーを所与のものとして笑いを考察したうえで、しかも笑いをその原因や社会的な機能から分析して論じている。それゆえに、それらの笑いの理論は当該のコスモロジーの内部では妥当しても、その特殊性を超えて、「笑いそのもの」の普遍的な基底を探り当て、そこから笑いの一般理論を展開し得ているとは言えない。端的にいえば、それらは文化という次元の自覚に立って自らの論理を相対化していないがゆえに、一般理論としては破綻しているのだ」（小馬 1999：4）。

小馬はこのように述べた後、その返す刀で、特定の文化や作品における笑いやその質を論じようとする場合にも、人間に固有で且つ普遍的な笑いという現象が成立する条件を無視すべきではないと指摘する。そこから、小馬は、個別の文化的文脈に拘束された言語と笑いとを記号論の視角から互いに相対化し、反言語的であり、言語を無化する作用に立脚するものとして笑いの基底を解明しようとした（小馬 1999）。小馬の試みは、文化相対主義的かつ普遍主義的な人間理解の探求である。本稿が目指すもこのような探求である。

本稿では、困難な状況における人間行為と笑いとの関係に注目する。零細商人マチンガのさまざまな商実践、生きぬき戦術を観察していると、「追いつめられた人間行為」それ自体に面白さを感じるが多々あった。同時に、「追いつめられた人間行為」を忌憚なく笑うことが可能なのは、それを許容する特有の社会的・文化的な文脈と、そのような文脈を前提として「追いつめられた人間行為」をユーモアや滑稽さに積極的に転換する戦術、実践が遍在していたためでもあった。本稿では、まず困難のさなかにおける笑いについて考察し、それを踏まえて零細商人独自の戦術、実践がどのように「笑い」を組み込んで成立しているのかを明らかにする。それを通じて最終的には、近代的な自己を逆照射し、マチンガの商世界の現代的な可能性について述べる。

1. 狡知とトリックスター

おそらく、まずはじめになされるべきことは、喜劇的なもの、ユーモア、嘲笑、グロテスクなものといった恣意的で抽象的な区別を捨てることである。というのも、それらに含まれる身振り、虚構、演劇化の操作などは、同じ決意から生まれ、同じたくらみを暗示しているからだ——爆笑と哄笑によって、ほんの一瞬でも世界の秩序を転倒しようとするたくらみを（デュヴィニョー 1993（p.16）『笑いのたくらみ—喜劇性と滑

稽さの博物誌』 p.15)

まず、追いつめられた人間行為を許容する社会的・文化的な文脈と、追いつめられた人間行為を「笑い」に変換する戦術、実践のいずれにおいても重要となる「ウジャンジャ（狡知）」について簡単に説明し、本稿のねらいがどこにあるのかをより正確に説明しておきたい。

ウジャンジャは、スワヒリ語で「賢さ」と「狡賢さ」の両方を意味する言葉であり、戦略的な実践知である。私が、ウジャンジャを狡知と訳した理由は、狡知（狡智）と訳されることの多い古代ギリシア思想におけるメティスとウジャンジャが大部において近似していたことによる。今村仁司らの説明によれば、メティスとは、航海術であり、舵取り術である。風や荒波などの人間の力ではいかんともしがたい諸力を操る知であり、正確な測定や精密な計算、厳密な推論ではとうてい歯が立たないような変転する状況において、おおよその正確さをもって即興的に発動される近似的な知である（今村 1985：cf. ド・セルトー 1987）。まさに、突発的な窮地、困難において、非近似的（＝未来を見据えた）解決を試みるのではなく、それまでの経験から瞬時にみちびきだした策を弄して、即興的にその場を切り抜けていくときに発動される知識-即-行為である。

ただし、ウジャンジャという用語について当該諸国の人びとに説明を求めると、東アフリカ諸国に広く普及するトリックスター民話において主人公のトリックスターがおこなう諸々のずる賢い知恵、または「やり方」が例示される場合が多い。トリックスターとは、世界各地の民話や神話、文学などに登場する文化的英雄であり、いたずら者である（cf. ハイド 2005; 山口 1975, 1980, 2007; ラディンほか 1974）。東アフリカでは、野ウサギやクモなどがその代表である。トリックスターは、体は小さく力も弱いのが、狡賢い知恵で自分よりも力の強い相手をやりこめる知恵者である。

路上商人をはじめとしたインフォーマル経済従事者が、みずからの行為を「英雄」としてのトリックスターになぞらえて説明する時、ウジャンジャの発揮は反逆的なものとなる。たとえば、路上商人を取り締まる警官との攻防において、逃散、無知を装うといった「弱者の武器」（Scott 1985）を駆使するとき、あるいは不条理な政策を実施したり、果たされない公約を掲げる政治家を揶揄・諷刺するとき、ウジャンジャは権力者を貶めたり、嘲笑うための術となる。そこでは、民衆の論理と公権力の論理とがするどく拮抗するような世界がたち現われる。

しかし、トリックスターは必ずしも既存の道徳の文脈では「善」ではなく、また常に彼らの企みが成功するわけでもない。彼らの社会的効果は、むしろ既存の道徳的な規範から「自由」「無関係」であることで、社会的な秩序や「文化」に裂け目をつくることにある。たとえば、ルイス・ハイドは、トリックスターを「関節＝業師」と名づけ、その破壊的創造力について次のように述べる。私たちはみずからが再生産しつづけている文化や社会をあたかも永久不変のものとなし、みずからの世界を形づくる作業に参加する／できることを忘れる。みずからが形づくっている文化に人々が苦しめられるとき、トリックスターは古い境界を消し去ったり、窮屈な区分を緩めて接合部に油を塗ったり、そこに開口部をつくり「規則」が禁止を命じていた場所に交渉を開始させたりして、文化の根本的な形状を変化させる（ハイド 2005：380-426）。

アフリカ社会の笑いが取り上げられるとき、トリックスターの非-道徳的な側面はあまり注目

されない。それは、ミハイル・バフチン（1995）がフランソワ・ラブレールの作品を用いて示したように、カーニバル的なグロテスクで陽気な笑いが弱体化し、非公式な笑いから公式的な笑いへと転換したこととも無関係ではないだろう。すなわち、民衆的なグロテスク・リアリズムに正面から向き合うことをやめ、社会や政治に対するマジメな風刺やアイロニーへと関心が移っているのだ。上で述べたように、路上商人の研究において「民衆」の主体性が注目されるときにも、暴動や日常的抵抗がクローズアップされる。だが、アフリカの人びとの笑いは何よりもまず日々の人びとの生活のなかにあふれており、社会との関わりや生計実践、日常的な困難のやりくりなど、あらゆる局面、至る所で立ち現われる。

2. 嘲りと笑いの非 - 道徳性

笑いを組み込んだマチンガの商実践について検討するまえに、私がタンザニアで遭遇した二つの出来事を事例として、追いつめられた人間行為と笑いについて考えるための二つの論点を導きだす。第一に、私たちが想定しうる「キャラとしての私」と「素顔としての私」を使い分けることを基礎とした、笑われる、嘲られることをめぐる技、戦略は、突発的な窮地、瀬戸際では困難なこと。第二に、そもそもその時々々の難局を常に切り抜けつづけている人びとにとって重要なこととはつねに「変身」しつづけていくことであり、このような仮面と素顔の二項対立的な近代的な自己は、笑う、笑われる、笑わずという局面において問題にならないことである。

2-1. 嘲りを受ける「私」と私

なぜわれわれは、その場その場を切り抜けるような生き方に困難を感じ、窮地や瀬戸際に陥ることに恐怖するのか。笑われる、嘲弄されることに困難さが生じるのはどのような場合なのか。ここでは私自身が笑いの対象、ネタとなった事例を取り上げる。

【事例1】

2002年のある日、私はムワンザ州ミスングイ県の農村で開かれる定期市で古着商売を参与観察するために、仲間の商人と一緒に古着を販売しに行った。農村の定期市を訪れるのはその日が初めてで、物珍しそうに外国人の珍客を眺める農民たちの視線に私は気恥ずかしさを覚えていた。仲間の商人にせかされながら、地べたにビニールシートを敷き、その上に一枚500シリングのシャツを山にして載せた。ただ、仲間に教えてもらった客寄せのための決まり文句を叫ぶのはどうしても恥ずかしく、照れながら目の前を通り過ぎる客に、「シャツ、いらない？」などと声をかけるのが精いっぱいだった。しばらくして隣で商売をしていた仲間の商人に、「何をへらへらしているんだ。そんな小さな声じゃ誰も集まってこないぞ」と注意される。覚悟を決めた私は、めいっぱい息を吸いこんで「あ～シャツ、500、シャツ、たったの500だよ、今日はボスが酔っぱらって、破格の値段だよ。似合っているよ、輝いているよ。奥さん喜んでおかげが増えるう、旦那さん喜んで子供ができるう、さあ、買った、買った、たったの500シリングだよ」と大声で叫んだ。

市場中の人が一斉にこちらを振り返った（ように感じた）。あっという間に人だかりができた

のだが、人びとは私を指さしてひそひそと話しながら、遠巻きに眺めているだけだった。一人の老人などは、あぐりと口を開けたまま私を凝視し、完全に時を止めてしまっていた。

さきほど私に注意した商人が、「おい、その田舎者の爺さん、シャツは500シリング、白人の見物料は200シリングだよ」と老人を指さしながら叫んだ。老人があわてた様子で立ち去ろうとすると、見物人のあいだでドッと笑いが起きる。気を良くした仲間の商人は、かぶっていた帽子をひっくり返して「ハイハイ、他の皆さんも、お代はこちらに」とおどけた調子で見物人から「おひねり」を集めた。そのおどけた様子がおかしかったのか、見物人たちのあいだでふたたびドッと笑いが起きる。

勇敢な一人の女性客が「あなたは外国人なんだから、私たち貧乏人と商売したいなら、安く売らなさいよ」と詰問調で叫ぶと、またドッと笑いが起きる。返答に困った私の代わりに、別の商人が「オーケー、それならシャツは300、ガイジンの見物料が200で、ぴったり500シリングだ」と切り返すと、「それじゃあ、さっきと値段が変わらないじゃないか」と見物人の一人が応じて、またドッと笑いが起きる。笑いの渦のなかで一人どうしたらよいか分からず、赤面して立ちつくした私をそっちのけに、遠巻きに眺めていた人々が一気に押し寄せ、我先にとビニールシートの上の古着を選びはじめた。

人間は言葉を発しなくても、さまざまな方法で社会規範や社会常識とされるものから「逸脱」する人びとをけん制し制裁を加えることができる。じろじろと眺める、長く沈黙する、視線をそらす、貧乏ゆすりをする……。笑いも、そのような逸脱者に対する懲罰的な機能を果たす行為のひとつである。ベルクソンは、笑いに関する三つの観察を通じて、笑いの懲罰機能を軸足においた理論を展開した。第一に、本当に人間的なものを除いては、おかしさはない。第二に、笑いには「思いやりのなさ」「無感動さ」が伴う。笑うとき、われわれは一瞬の間、愛情を問題外のものとし憐れみの気持ちに沈黙を挟み込む、あるいは滑稽さは心情の瞬間的な麻醉状態のようなものを必要とする。第三に、笑いは、その底意において集団的なものである。つまり、ベルクソンは、他人の「おかしさ」を笑うとは、共同で営んでいる生活、社会に対して持つべき注意力や適応力、柔軟性、すなわち良識を欠くことで生じた、身体的、精神的なくぎこちなさを罰するという、社会的な機能であると論じたのである（ベルクソン 2001）。マイケル・ピリッツが大著『笑いと嘲り』で設定した主題も「嘲り」の残酷的な側面—ダークサイド—である（ピリッツ 2011）。

私は「金持ちであるはずの外国人は、田舎の定期市で二束三文の古着のたたき売りなどしない」というタンザニアの人びとの通念から逸脱していた。この事例は、逸脱者としての私に対して戸惑いやいぶかしがる視線を投げかけ、私との距離を測りかねていた人びとと私との関係を、仲間の商人がその場の社会的な文脈に位置づけて定義しなおし、私を大道芸人や珍奇な動物かのように「見られる」存在へと転換したことから始まった。一方的に「見られる存在」となったこととは、「客体=物」となったことを意味する。

突如、何かの「キャラクター」のような立場に置かれた私は、いたたまれない気持ちになった。だが、ここで私が、いたたまれない気持ちになったのは、嘲りの対象や笑いのネタにされたからではない。その種のいたたまれなさは、「見られる存在」になる前から、すなわち農村定期市

についた時点から感じていたことだ。私には、みずからが彼らの世界の「闖入者」であり、当該社会の常識から逸脱した行為をしているという自覚があったし、人びとから「おまえは何者だ」という問いかけを受ける一いぶかしがる視線やひそひそ笑いも含めて一覚悟もあった。「見られる存在」になった後に、私がいたたまれられない気持ちになったのは、私が固有の人格と身体をもつ個人として「嘲り」の対象となったのではなく、「ハクジン」（日本人も「白人」である）あるいは「ガイジン」という抽象的な存在として笑いの対象、ネタとなったこと、つまり私の固有性とは関係のない、まさにキャラ化された地点で、私が笑いのネタになっているという事態に対する「なすすべのなさ」に起因していた。私は、私自身が笑われたのであれば、みずからを笑い返すことで、笑う人びとに仲間入りを果たすことができたはずだ。結局、笑う群衆から疎外された私は、最後まで笑われる客体から笑う主体になるきっかけをつかみ損ねた。

しかしながら、嘲笑の対象とされる人びとが、つねに必ずいたたまれなさを感じるには限らない。まして笑われる体験を重ねることで、再帰的に笑われることを回避しようとする主体—瀬戸際に恐怖する主体—となっていくわけでもない。私は後述するように、零細商人の商慣行を参与観察（実践）しているうちに、「笑うこと」だけでなく、「笑われること」「嘲笑されること」においても心情の瞬間的な麻酔状態を経験したり、「笑われること」を好機とみなす心性を獲得したり、笑われる状態からの回復をコントロールしたり、笑われることの快楽を追求したりもした。

笑われても平気な状態を想像することは困難ではない。すぐさま思いつくことだが、笑われることを商売にする本物の大道芸人は、「芸人」としての彼／彼女と、「素顔」の彼／彼女個人を区別しているだろう。仮面としての人格、キャラとしての「私」と、複雑な内面をもった素顔の私などといった区別は、不明瞭なものかもしれない。しかし大道芸人は、少なくとも笑われているとき、いま人びとに笑われているのは私ではなく、私の「キャラ」「キャラクター」であることを了解しているだろう。すなわち、「笑う—笑われる」「嘲る—嘲られる」関係には、笑う主体—笑われる主体以外にも、笑われる対象物、キャラ／キャラクターとしての「私」—個体としての私の関係がある。笑われる仕事、あるいは笑われることで特定の共同性において特別なポジションを得ている人びとは、笑われる「私」と私との距離を引き離すことで嘲りのダークサイドに引きずり込まれることから私自身を守ったり、逆に私と「私」との距離を近づけることで、本来の私を垣間見せ、嘲りの力や正当性を弱体化・無化したりしている。このように私たちは、「笑われる」「嘲笑われる」をめぐる技が発揮されていると想定する。

以上を確認したうえで、本稿の問いとして重要なのは、このような「笑われる」「嘲られる」に関わる技は、突発的な窮地、瀬戸際ではしばしば困難なことである。これが、本稿においてアフリカ社会と笑いを考えるうえでの第一の論点である。

2-2. 笑いの非 - 道徳性と人格のあふれ出し

笑いには、慈しみや愛しさの表出や、ただただ可笑しくて仕方がないといった陽気な側面もある。箸が転んでもおかしい年頃はとうの昔に過ぎたはずの私も、なにかの弾みでツボに入り、風に吹かれる洗濯物を見ても笑い転げてしまうことがある。ただ陽気な気持ちはたいてい長続きしない。まるで夢から醒めるように、高揚した気持ちが突然に消えてなくなる瞬間がある。

【事例2】

クリスマスに調査助手のロバートとブクワの三人で少し遠出し、ビクトリア湖畔沿いのビーチに飲みに行った。酒にめっぽう弱いロバートは夜7時を回るころにはべろんべろんに酔っぱらった。酔っ払いに恐れをなしたタクシーや市バスに乗車拒否され、私とブクワは酩酊したロバートをどちらが背負うかをジャンケンしながら、二時間以上も彼を担いで町まで戻ってきた。

夜市が開かれている橋の麓でロバートをいったん解放し、いやはや疲れたとへたり込んでみると、後ろから「うおう」という得体のしれない叫び声がする。振り返ると、ロバートが夜市で買い物をしていた男性の足に立ち小便をしていた。あわてて駆け寄った時にはもう遅くて、小便をかけられた男性に強烈なパンチを食らったロバートが空中に弧を描いて吹っ飛ぶのが目に入った。砂ぼこりをあげて地べたにたたきつけられたロバートは、そのままゴロンと寝転がると、けらけらと笑いだした。つられたように小便をかけられた男性も笑いはじめた。小便をかけられた男性は、「おまえは犬か」「俺が小便ちびつたみたいじゃないか」「ああ、臭い、臭い」と笑いながら、ロバートを小突きまわす。ふらふらの状態のロバートにはパンチがなかなかヒットしない。夜市に集まった人びとは、男性のこぶしが彼をかすめるのを見ながら、「ああっ」とか「ほいっ」などと奇声をあげながら、まるでサッカーの試合をみているように同じ波長で歓喜する。しまいには、夜市中の人びとがみな腹をかかえて笑いはじめた。

ひとしきり笑った後、私たちはロバートを引きずるようにして彼の自宅まで送り届けた。ところが、ロバートが部屋のドアを開けるのを確認して帰ろうとした途端、彼はとつぜん振り返ると、「そうだ、サヤカを送っていかなくてはならない」と宣言した。私は一瞬、意味が分からず、「せっかく苦労して送ってきたのに、私を送る…」と自問した。すると、ロバートもポカンとして「だってもう夜遅いし、近くまで送っていくよ」と当たり前のことのようにいう。「いやいや、途中までブクワも同じ方向だし、君は一人で歩けないほど酔っぱらっているし、私は大丈夫だよ」などと断ったのだが、「夜道は危ないから、絶対に送っていく」と主張する。ブクワをみると腹を抱えて笑いながら、「送ってもらえよ」という。

バスに乗り込んだ瞬間、いびきをかいて寝てしまったロバートの後頭部を眺めながら一日に起きた出来事を思い出しているうちに、私はおかしくて仕方がなくなった。いつまでも笑いをかみ殺していると、それまで一緒に面白がっていたはずのブクワが急に真面目な顔をして「そんなに笑ってやるなよ」という。

この出来事には、種類の異なるいくつかの笑いが連続して生じていた。男性に殴られて地面に寝転がったロバートがけらけらと笑ったのは、何もないところで転んだ人が自分自身を笑うことと本質的には変わらない。しかし、「夜市」という祝祭的な空間であったためか、彼が彼自身を笑う行為が、突如として陽気な笑いがあふれ出す裂け目となった。

だが陽気な気持ちは、バスに乗り込んだ後のブクワの一言で終わりを告げた。民衆の笑いは本質的に「非-道徳的（モラルフリー）」な行為である。「不道徳」な笑いはユーモア、「反道徳」な笑いはエスプリだが、民衆の高らかなる笑いは道徳や規範から解放された「非道徳的」地点においてのみ成立する。先に述べたように、嘲りに向けられる対象は、その瞬間に笑う人びとにとっての憐れみの感情が凍結し、笑うことが可能な対象「物」となる。ブクワが真面目になっ

たのは、私がまだ彼らの世界にしっかりと参与しておらず、バスにおけるロバートの態度をロバートの素顔であると私が感じた、ブクワが察知したからである。彼らにとってそれは素顔ではない。素顔であると感じた私の笑いは「不道徳的」「反道徳的」であったのだ。

当時、私は市中心部からバスで30分ほどのキリマヘワ地区の長屋の一部屋を借りて住んでいた。ブクワはそのさらに先にあるバシアシ地区にある長屋で妻と娘と三人で暮らしていた。ロバートは市内中心部に近い場所に住んでいたのだが、商売や調査で夜遅くなると、必ず二人で私を長屋まで送り届けてくれた。酩酊して私たちに担がれ、夜市で見知らぬ人に小便をかけた後でも、習慣化された役目を遂行しようとしたロバートの行為は、彼がその瞬間も維持した普段の自己像—外国人の少女／友人を送り届けるボディ・ガード—と、酔っぱらった現実の彼の姿とのズレを顕現させ、私とブクワに笑いを引き起こすものとなった。と同時に、ロバートの行為は、酩酊してもなお、友人として調査助手としての責任感（社会的な人格）、あるいは私に対する優しさだけは忘れなかった彼本人の「素顔」「本性」を窺わせるものともなった。可笑しくて仕方がなかった私の気持ちにはうれしさも混じっていたが、私の思いだし笑いは、ブクワの目にはロバートと私の友人関係や「保護する—保護される」関係において私が採ってしかるべき態度—「感謝」「負い目」—からの逸脱、「不道徳な行為」に映ったのだ。

さて、突発的な窮地に陥った人間行為、追いつめられた人間行為についての私たちの一般的な評価は、酩酊状態における人間行為に対する評価と似通っている。たとえば、「嘘がばれた」「浮気がばれた」といった突発的な窮地を切り抜けなくてはならない状況において、人間はごまかし、見苦しい言い訳、自己弁護、逆切れ、オウム返し、猿まね、硬直、爆笑、慟哭といった不可解な行動をする。窮地は「頭が真っ白になった」といった思考の真空地帯をつくりだす。そのため、窮地における行為は、しばしば意図せずに露呈したその個人の一面—弱さやずるさ、暴力性—として理解され、それまでの人物像を容易に塗り替える。この場面ではお互いに笑えないことが多い。人は平常時に積み重ねている自己像を、いちどの瀬戸際の行為によって崩されることに恐怖する。その恐怖とは、「思わず、素がでてブチ切れた」といった表現にあるような、「キャラ」としての人格と、素顔としての人格との距離が、突発的な窮地に操作不能になる恐怖である。

だが、突発的な窮地において生じるのは、はたして「素顔」のあふれ出しなのか。そもそも「キャラ」としての「私」と「素顔」としての私を適切に管理、操作するセルフ観は、普遍的なもののだろうか。哲学者の坂部恵は『仮面の解釈学』において、主語を欠いた述語でも構成される日本語の文法に依拠しつつ、西欧的な自己同一的な自我、主語としてのわたしに疑問を投げかけ、次のように述べている。

「わたしたちは〈素顔〉を信じる。素顔こそ人間のリアリティであると思う。仮面とは、大方、自己同一的な自我の上に外部からかけられた覆いにすぎない。こう信じて、この信念あるいは感覚そのものが、特殊近代的に制約されたものであることをおもってみることはほとんどない。わたしたちは、いまや、〈おもて〉を、〈表面〉として、〈表象〉としてしか感受しえない。人の〈おもて〉も、また世界の〈おもて〉も、だ…（中略）…自己同一的な自我と世界のうちに閉じ込められ、封じ込められて、いわば現実との生きた接触をうしなった類分裂病的とでもいうべき近代人の世界には、真の〈変身〉も、また、他の領域へと超えて、運ぶ（phoreo）、〈メタフォラ〉

metaphoraつまり〈メタフォル〉metaphoreもありようがない」(坂部 1976: 45)。

坂部のいう、近代の病の源たるセルフ観は、デブレイヤーージュにおいてはすでに乗り越えられている。ありあわせの材料を用いて困難の解決を目的的にめざすプリコラージュとは異なり、デブレイヤーージュは、ひとたび切り抜けても予想外のところから次なる難局がやってきて、それを切り抜けても次なる窮地がやってくる。切り抜けに切り抜けを重ねている人びとにとって重要なのは、本当の自分、私の本質、ベルソナとは異なる素顔などではなく、その刹那、その場を即興的に切り抜けるために、つねに変身しつづけていくことである。これが、第二の論点である。次節では、マチングの商行為を対象とし、「笑われることのカタルシス」の説明からはじめて、商交渉に追いつめられた人間行為と笑いとの関係がいかに関わり込まれているのかを明らかにする。

3. 商交渉における笑いのメカニズム

笑いを組み込んだ商交渉について述べる前にまず、行商人に向けられる「笑い」—からかいや嘲り—がどのように生じるのかを例示する。

3-1. 嘲りを受ける側のカタルシス

行商人は、客によくみえるようにお勧めの商品を携えて路上を練り歩く。たとえば、古着の行商人の場合、首から下げた紐に10個ほどのハンガーをひっかけ、仕入れた100枚程度の古着のうち、おすすめの10枚ほどをハンガーに吊るし、10枚ほどをたたんで腕に載せて、残りの衣類をビニール袋やリュックサックに入れて担ぐというスタイルが一般的である。そして歯の隙間から「シー」や「プスプス」という注意音を鳴らしたり、「シャツ、シャツ」「ズボン、ズボン」など商品の種類を宣伝しながら歩くことで客を探してまわる。私が参与観察をしていた2000年代前半において、古着の行商人ひとりが一日に客から声をかけられる回数は、最低でも50回は超えていた。100回以上にもなる日も珍しくなかった。ただし大半の客は購入しないので一日の販売枚数は10枚から15枚、よく売れた日でも30枚を超えることはめったになかった(販売記録の詳細は、小川 2011: 97 参照)。客のなかにはその行商人が持っている商品を欲していたが、サイズが合わなかったり、手持ちの金額が売値に届かなかったりした者もいたが、大半はとくに欲しい商品があるわけではないものの、目の前を行商人が通ったので試しに呼んでみたという者たちである。ウィンドーショッピングに問題がないように、行商人たちも呼び止められて商品を確かめた後に、「欲しい商品がなかった」と断われても特に気にするわけではない。ただなかには、悪質な「からかい客」もいる。

【事例3】

私は、2002年当時、商交渉の参与観察のため、調査助手のロバートと彼の友人であるラス・ドゥーラの三人で中古の紳士服の行商をしていた。ある日、灰色のつなぎ(オーバーオール)をきて魚市場の警備の仕事をしていることから、「灰色つなぎ」と行商人の間で呼ばれている有

名な「からかい客」に遭遇した。彼は、さんざん試着をくりかえした後に、「どれが一番、俺に似合っていたか」などと聞くことを常としていた。「どれもたいへん似合っていましたよ」と答えると「いい加減なことを言うな」と憤り、「先ほど試着した黒いシャツは流行のデザインだからお勧めです」などと応対しても「は～ん、それが売れ残りか」と疑う。行商人が返答に窮すると、「お前は何年、商売をしているのだ」「いつ田舎から出てきた」などと馬鹿にしてゲラゲラと笑う。とにかく面倒な客であり、面倒だけで購入してくれるならばいいが、結局いつも購入しないので、多くの行商人に煙たがられていた。

いつものように灰色つなぎは、試着をはじめた。買わないことを知っているロバートとドゥーラは、彼が指さした古着について「それは売約済みだ」「それも売約済みだ」といつて早々に交渉を切り上げようとした。すると、灰色つなぎは、わざわざ売約済みだと説明したなかから一枚を選んで、「どうしてもこれが欲しい」と主張しはじめた。そのシャツは、明らかに彼のサイズにあっていなかった。「売約済み」は交渉を切り上げる方便だったので、ロバートが「2500 シリング以上で買ってくれるなら、売ってもいい」と交渉をはじめると、「500（シリング）だな」という。この時に販売していたシャツの仕入れ値は1500シリングだった。行商人は、すべてのシャツを一律価格で売るわけではなく、たとえば、2500シリングで売れたシャツが他にあれば、仕入れ値やそれを少し下回る価格でも交渉に応じて販売することがあった。だが500シリングのシャツは、先に提示した農村の定期市でたたき売りされる安物（最低ランクの古着）の相場である。灰色つなぎも500シリングという価格が非現実的な価格であることは、承知しているはずであった。

「あなたの値段は、（販売可能な価格から）遠すぎる」といつてシャツを引き取り、立ち去ろうとすると、「おい、チンガ。カネが欲しくないのか？ 1000シリングまでなら出してやったのに」と捨て台詞を吐かれた。頭にきたロバートが、「わかった、売ってやる」と戻ってくると、灰色つなぎはとつぜん慌てふためいて、「よく見たら、そんなに良くないかもしれない。他もよくみて…」などと言い始めた。「あんたがどうしてもそのシャツじゃなきゃ嫌だといっただろう。買え。言い値の1000シリングで売ってやるから、買え」と迫ると、どうやら現金を持っていなかったらしく、顔を真っ赤にして奇怪な言い訳をはじめた。ロバートは、「マチンガをからかっている暇があったら、シャツを買うカネくらい稼げよ」と言い捨てて立ち去った。

この事例はやや極端な事例であるが、行商をしていると、からかわれたり、愚弄されたりといった経験を頻繁にすることになる。2006年の労働力調査では、タンザニアの都市人口の66%が、主たる現金稼得源としてインフォーマルセクターを挙げている（Tanzania 2006）。零細商人はそのうちの最大多数を占める、タンザニアの都市部の社会経済の主流派であるが、特別な技能や知識、コネを必要としないため「誰にでもできる仕事」とみなされており、公務員や民間企業の労働者だけでなく、インフォーマルセクターのなかでも社会的なステータスは低い。親が子どもに「勉強しないと、将来マチンガになるしかないよ」などと説教することもよくある。そのため、行商人をからかって暇つぶしをしたり、日ごろの鬱憤を晴らすことにためらいを感じない消費者は多い。

事例とは異なり、行商人はからかいや愚弄、嘲笑といった客の態度に対してつねに憤るわけ

ではない。むしろたいいの場合、からかいは、冗談関係のような親密さを醸成し、商売を円滑にするための潤滑油のような働きをしている。

たとえば、先に述べたように当該社会の社会常識から逸脱した存在であった私は、たんなる物珍しさから客に呼びつけられることが多かった。「おい、シャツ」「おい、チンガ」などと呼ばれ客のもとに駆け寄ると、「お前、どこから来た」「結婚しているのか」「今晚、俺とどうだ」といった冗談とも本気ともつかない口説き文句から交渉が始まった。「お前、どこから来た」はさておき、このような行商人に対する「からかい」は、女性の行商人ならだれでも経験していることのようにだった。私は、女性の行商人仲間から、からかい客に対する切り返しの定型文句を何十通りも伝授された。たとえば、「手は洗い終わったけれど、食べるのはおあずけ。目で愛でるだけにして」「じゃあ、まずはエイズ検査の結果をもってきて」など。そのような切り返しに客が憤ることは稀であり、たいいの場合、まず見物人やとりまきのあいだで大爆笑が起き、からかい客も「こりゃ、やられた」といった顔をして笑い、和やかに場は収まる。

男性の行商人も同じである。女性客のなかにも「ムニャオ *myao* (猫なで声ですり寄ってくる者)」と俗称される、性的な交渉と引き換えに無料で商品を販売するよう誘いかける者がいる。その気がない行商人は、「俺の妻と比べて君のどこが魅力的なのだろう。外見じゃないとしたら、あっちのほうか」「歳をとっても、アソコの締まりが変わらないのが真実か、試せてことか」などとかなり卑猥な切り返しをする。また、そうした「ムニャオ」の存在が広く社会に共有されていることを前提に、先に事例に挙げた「灰色つなぎ」のような女性のからかい客に対して、「それで、俺のところで何晩、寝てくれるんだ」と仕返しをしたりもする。顔を赤らめる女性もいるが、やはり大半の客は大笑いして「で、いくらなら、お兄さんと寝ないでも売ってくれるのさ」などとやり取りが始まる。このように笑いを交換することでからかい客とのあいだで親密さが生まれ、固定的な顧客関係を結ぶようになることも非常に多かった。

つまり、からかいを上手に切り返すことができるのは、固定的な顧客を獲得するための通過儀礼であった。行商人たちは、からかいを「チャレンジ」だとよく説明した。そのチャレンジを受けて立ち、見事切り抜けてみせることは行商人としての才覚を示すと同時に、ある種のカタルシスをもたらす体験ともなる。低い社会的ステイタスにおかれている彼らは、このようなからかひの機会において日常の関係性を転倒し、日頃の鬱憤を晴らすことができるのだ。

3-2. 笑いを組み込んだ商交渉

笑いの理論を体系的に整理した研究では、笑いの理論をそれが登場した順に、優越理論、ズレ(不一致)理論、放出理論に区分している(cf.スマジャ2011;ビリッツ2011:61-190)。次に、これらの理論を適宜参照しながら、行商人の交渉術が「笑われること」を組み込んで成立していることを明らかにする。

タンザニアにおいて行商人と消費者の値引き交渉は基本的に、「より高く買ってくれ」と「より安く売ってくれ」の駆け引きを、それぞれの私的な理由づけとともに展開するもの—「困った」合戦—となっている。たとえば、行商人が「より高く買ってくれ」の根拠としてよく提示するのは、「昨日から何も食べていないから、私を助けると思ってもう少し良い値段で買ってくれ」「ついこの間、(路上商売を取り締まる)警官に商品を没収されたばかりだから、その値段で売った

ら経営が破たんする」などである。これに対して、消費者の側も「最近、仕事にあふれてお金がないから、何とか負けてくれないか」「妻がずっと病に伏せていて衣類を買う余裕がなく、もう着ている服がぜんぶボロボロなんだ。何とか手に届く価格で売ってくれ」などと交渉する。こうした交渉は、はたから見ると真剣に駆け引きしているようにはみえないほど、笑いにあふれて楽しそうである。以下では、この商交渉を事例として、追いつめられた人間行為が引き起こす笑いの効果がいかに交渉術に組み込まれているのかを検討してみたい。

いっけんすると、行商人と消費者とのありふれた交渉は、互いにへりくだって自身の窮状を訴え、それにより相手から同情や共感を引き出すことを狙ったもののようにみえる。だが、それは表層的な解釈である。実際には、行商人も消費者も商交渉に嘘や誇張が含まれていることを承知しているので、互いが訴える説明内容に納得し、同情心や共感に基づいて、売値／買値の合意に達することはめったにない。ここで生じている笑いとは、嘘や誇張をつかうことにさえ「なりふりかまわず」の姿、すなわち追いつめられた人間行為に観察される必死さが、それをみた相手に一瞬の優越を感じさせるものだと考えたほうが、まだ筋が通る。つまり、他者の欠陥や自分自身のかつての姿と比較することにより生じる、突然の優越感が笑いをもたらすとする優越理論における笑いだ。追いつめられた行為は、他者の窮状を踏み台にした自己の現状肯定を必要とする者にとって、たしかに暗い喜びをもたらす。

ただし、ここでの「なりふりかまわず」の姿や行為は、演技されたものである。マチンガたちは、この演技性とウジャンジャ（狡知）を結びつけて、そもそもの前提における関係性を転倒させている。行商人たちは、「人のよさそうな富者に対しては同情に、同じ境遇を生きる仲間に対しては共感に、流行に敏感な若者に対しては自惚れに、権力者に対しては優越感に、正義感には不条理さの理解に訴える」といった形で、相手に応じて交渉文句や交渉時の態度を変幻自在に使い分けることができることを「ウジャンジャ」な行商人の条件として語る（小川2011：168）。このように語るときの行商人は、優越感、暗い喜びを感じさせるよう働きかけているのは自分自身のほうであると、相手よりも精神的な優位性を感じている。つまり、彼らは自身を嘲るよう仕向けている主体であり、嘲りを向けられる客体ではない。あるいは、みずからを嘲ることで喜びに浸る者をひそかに嘲る主体なのだ。

しかし、優越感ほど伝わりやすい感情もない。じつは大半のウジャンジャな戦術は、気づかれても別に構わない、むしろ気づかれることをなかば想定して行っているものである。たとえば、体を少し折りまげて腹に手をあて、情けない表情をつくりながら、「腹が減ってしかたがない」と訴える行商人に一度も出会ったことがないという消費者は少数派である。都市の消費者の大半は、マチンガの口の巧さを知っており、彼らの大げさな身ぶりや口ぶりに対して身構えながら、商交渉に臨む。ここで行商人たちは「計算高さ」がなかば露呈しているからこそ、あえて大きさに困窮を説明し、過剰な身ぶりや交渉をおこなう。「嘘／演技だとばれているのに、嘘を通したり演技をしつづけることのばかばかしさ」、あるいは「ばかばかしいことをそれでもやるという滑稽さ」によっても消費者に笑いをもたらすことを知っているからだ。

この笑いは、ズレ（不一致）理論における笑いである。ズレ（不一致）理論とは、類似したものを一致させ、そのずれ、食い違いを知覚することで笑いが起きることを説明する理論である。威厳のある人物がその高い地位にふさわしくない態度を採ったり過ちを犯すことなどだ。「芸」

としての笑いでは、このズレがよく活用される一立派な地位にある大人が子どものように駄々をこねるなど。

行商人たちのウジャンジャな交渉術は、対面する消費者に応じてその場その場で変更するものであるが、そのベースとなるのはそれまでの社会経験を通じて、自身の身体的、性格的な特徴を知覚し、醸成した「スタイル」である。たとえば、ロバートは細身の体型をしており、「腹が減った」という訴えを効果的に伝えやすい身体的な特徴を持っていた。だがドゥーラはどちらかというとふくよかな体型をしており、「腹が減った」という文句をストレートに使うことは難しかった。一方で生まれも育ちもムワンザ市という生粋のシティ・ボーイであるロバートとは異なり、本人曰く「ド田舎」で育ったドゥーラは朴訥とした人の好きを感じさせる雰囲気をもっていた。そのため、ドゥーラはわざと客の前で商品を落としたり、どもったり、スラングの言い間違えをしたりすることで、「努力しても、なかなか生き馬の目をぬく都会で商売が成り立たない」ことを自然なかたちで訴えかける術を身に着けていた。

上述した通り、彼らはこうした個別の戦術をうすうすと消費者が感じとる、すなわち、「腹が減った」という言葉が常套文句であったり、商品を落としたりといった行為が意図的なものであることがばれることも半ば想定している。消費者が自身の演技に参加する気になったことに気づいた行商人たちは、それまでの演技にひるむことなく、むしろ徹底的に押し出すことで、その行為を笑いへと昇華させる。そこまで大ボケをかます田舎者はいないだろう、そこまで卑屈にゴマすりをする貧乏人なんているのかという次元になれば、彼らは笑うことができる。ここで重要なことは、この滑稽さを演じる行商人は、最終的に消費者との共演によりともに笑われるカタルシスへと向かう点である。こういうことである。

行商人が大げさにやればやるほど、「いまは思う存分、嘲笑ってもよい」なぜならば「これは舞台のうえの演技である」といった感覚を消費者にもたす。ただしここで重要な点は、私たちはしばしば舞台をみるとき、あるいは演じ手を理解したいと欲した時に、演技者の仮面の裏側にある素顔、あるいは舞台の裏側をみたいと欲するが、タンザニアの消費者たちは、そうは思わないことである。滑稽にふるまう行商人とは、追いつめられた時の多様な人間行為（述語）を過剰に表現したパロディとしての「像」であり、そこには素顔が本質でありキャラは演技であるという二項対立の根底がない。あらゆる像が素顔であり素顔ではない境地が開けた世界が横たわっている。消費者は行商人のフィルターを通じて、ふだんの自分たちの行為を笑い、切り抜けに切り抜けを重ねて生きてる日常そのものを笑っていることもある。また、行商人もみずからの行為を笑う消費者を通して、みずからを、みずからの生きる困難な日常を笑っていることもある。いずれにせよ、マチングとそこに参与してくる人びとにより立ち現われている世界は、素顔と仮面、キャラといった二項対立的な構成秩序がない高らかな非道徳的な笑いの世界である。

消費者は、このような交渉を終えて、特定の値段での購入を決めるとき、「ああもう、仕方がないな」「まったくもう、うまいんだから」「いやだ、つい乗せられちゃったわ」といった感嘆の文句、またはにやにや笑いや肩をすくめる身ぶりとともに、行商人を「あんたは、ウジャンジャだ」と評価する。そこには、それまで行商人とともに埋没していた<いまここ>からふと我に返ったときの「気恥ずかしさ」をごまかす笑い、あるいは緊張を要する駆け引きからの解放による

安堵の笑いが生じている。

おわりに

われわれの生き方がわれわれに閉塞感を与えるとき、例えば見知らぬ人たちが織った織物のようで、元気を与えるよりは意気消沈させる模様を感じられるとき、そういうとき、もしもわれわれが幸運であれば、精神に潜む猿がわれわれを無気力から目覚めさせるために悪戯っぽいお喋りを始めるであろう。どうにも物わがりの悪い人々のためには、その猿はまずお決まりのトロップ・ア・ドープ[騙しの修辞]から始めて、規範をあまりに生真面目に受けとめれば、いわば自己拷問につながることを明らかにするであろう（ルイス・ハイド 2005『トリックスターの系譜』p.424）。

本稿の主題は、追いつめられた人間行為と笑いであった。まず、明らかになったことは、マチングの世界では、追いつめられた他者の行為は笑えるものであることだ。追いつめられた人間の行為は、それを見た他者に優越感を与え、暗い喜びをもたらすし、追いつめられた人間行為はふだんの彼／彼女とズレているために、滑稽である。しかし私たちはふだんそうした窮地におかれた人間の行為を大げらに笑ってはならないと考えている。なぜなら、追いつめられた人間行為を笑うことは、窮地においてうっかり露呈したその人間の素顔を笑うことになるという「道徳的」規範に従っているためである。素顔は、かくあるべき社会に適応したペルソナのために監視されており、人びとは素顔が露呈してしまうことに恐怖を感じている。

素顔をめぐるこの「病」について、近代的自己を哲学の立場から洞察した坂部（1976）は、主語と述語、主体と客体が明確に二極分化し、素顔こそが主語、主体であり自己であるとする現象を近代的な病として捉え、豊饒な述語的な世界にある変身の可能性を失った結果、人間存在と世界が窮屈になったと論じた。しかし、デブレイヤージュを重ねて生きる人びとの生活世界は、次々と訪れる難局を切り抜けていく即興的な実践にともなって絶え間なく変身（メタモルフォーシス）をし続ける、述語的世界である。マチングにとって、素顔はそもそも問題にならない。窮地、瀬戸際、追いつめられた状態において発露する赤裸々な姿—滑稽だったり暴力的だったり情けなかったりする姿—は素顔ではなく、難局を切り抜けるうえでのペルソナのバリエーションのひとつでしかないのである。だからこそ、彼らは困難のさなかにもいつもと変わらず笑うのであり、追いつめられた人間の行為を笑うことができるのである。その笑いは不道徳なものではなく、非-道徳なものでしかない。

マチングの商実践とは、このような日常に遍在するペルソナを過剰に表現したりパロディ化したり、変身、笑い続けるものである。人びとは、行商人の姿を通じて、日々の難局を切り抜ける自らの行為、姿を笑い、そして追いつめられた行為、姿であふれかえる困難な日常そのものを笑う。切り抜けて切り抜けてを重ねて生きるマチングにとり、みずからの日常を笑うことは爽快なことに違いない。坂部が洞察した近代の病はマチングにとってはやすやすと乗り越えられる笑いの一部であり遊戯でしかない。素顔とキャラにおける笑う、笑われる、笑わず技にはまだ坂部の言う近代的な病を根底とした優越性が潜んでいる。だから日本では「お笑い」に真面目ないじめの問題を感じたりするのだ。マチングの世界はこの根底がない真の遊戯の世界、

変身し続ける滑稽さとそこからくる笑い、さらに言えば誇り高い彼らの姿、個としての威厳がある。

ふふふ、ふふふ。笑うことは、たくらむことだ。このセカイは「ばかばかしさ」であふれていることを笑うように誘いかけ、たくらむマチングは、ハイド（2005）が言うように「関節＝業師」であり、困難を笑い、素顔を笑い、あらゆるものを遊戯に巻き込み、窮屈なセカイに裂け目を入れ、躍動する世界を日々望み笑いながら実践している航海者なのである。

参考文献

（邦文）

今村仁司（1985）『排除の構造』青土社。

小川さやか（2011）『都市を生きぬくための狭知—タンザニアの零細商人マチングの民族誌』世界思想社。

小川了（1998）『可能性としての国家誌』世界思想社。

小馬徹（1999）「笑い殺す神の論理—笑いの「反記号」論」小馬徹・寺澤正晴・古岩井嘉蓉子・湯田豊・百々佑利子・復本一郎・金谷良夫・中本信幸・倉田清著『笑いのコスモロジー』勁草書房。

坂部恵（1976）『仮面の解釈学』東京大学出版会。

スマジャ、エリック（2011）『笑い—その意味と仕組み』白水社。

デュヴィニョー、ジャン（1993）『笑いのたくらみ—喜劇性と滑稽さの博物誌』利光哲夫訳、東海大学出版会。

ド・セルトー、ミシェル（1987）『日常実践のポイエティック』山田登世子訳、国文社。

ハイド、ルイス（2005）『トリックスターの系譜』伊藤誓・磯山甚一・坂口明德・大島由紀夫訳、法政大学出版局。

バフチン、ミハイル（1995）『フランソワ・ラブレール作品と中世ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳、せりか書房。

ピリッツ、マイケル（2011）『笑いとはり—ユーモアのダークサイド』鈴木聡志訳、新曜社。

ベルクソン、アンリ（2001）『ベルクソン全集<3>笑い：持続と同時性』鈴木力衛・中沢紀雄・花田圭介・加藤精司訳、白水社。

山口昌男（1975）『文化と両義性』岩波書店。

山口昌男（1980）『仕掛けとしての文化』青土社。

山口昌男（2007）『道化の民俗学』岩波現代文庫。

ラディン、ポール／ケレーニ、カール／ユング、カール・グスタフ（1974）『トリックスター』皆河宗一・高橋英夫・河合隼雄訳、晶文全書。

レヴィ＝ストロース、クロード（1976）『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房。

（欧文）

Scott, James（1985）*Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Haven: Yale University Press.